

目次

わたしたちがみた当世美術館事情

06 年度美術館調査報告書

はじめに 福 のり子	03
調査美術館 一覧表	06
第1章 数値で見る美術館の現在	15
「1996年～2006年の総来館者数と年度予算」 斎田 千織, 内田 絵美子, 嘉原 妙	16
「1996年～2006年に開館した美術館・閉館した美術館」 小畑 哲也	34
「全国美術館 営業時間について」 熊本 由子	44
第2章 美術館内部から見た美術館	57
「美術館におけるワークシート式鑑賞教育の現状と問題点」 南 舞美	58
「美術館ボランティアに関する調査」 増田 真理子	90
第3章 利用者から見た美術館とは	103
「美術館ウェブサイトの調査」 井川 悠太, 横山 友里恵, 畠山 容美	104
「美術館来館者意識調査 -京都編」 岩澤 和泉, 阿部 麻衣子, 高橋 甲樹	116
「美術館の椅子」 内田 絵美子	126
「私的美術館探索」 沖江 恵	138
第4章 日本の文化行政の未来 指定管理者制度による美術館の変化に注目して	151
「指定管理者制度導入に伴って変わる美術館の運営体制について」 嘉原 妙	152
美術館調査を終えて 山下 里加	168
総括「インターネット座談会」	170

はじめに

社会のなかにあつて、優れた芸術作品と一番身近に出会えるところといえば、私たちはたいてい美術館を思い浮かべます。しかし、美術館は本当に私たちの「身近」にあるのでしょうか？ あるいは逆に、私たちは本当に美術館を必要としているのでしょうか？ 日本の美術館は 90 年代半ば以降、「冬の時代」にあるといわれています。今、美術館が直面している問題とはどんなもので、その困難な状況を乗り切るために関係者はどのような努力をしているのでしょうか？ その前に、私たちは美術館という言葉や建物を知っていても、本当にその活動や、存在意義や目的などを真剣に考えたことはあるのでしょうか？

京都造形芸術大学 芸術表現・アートプロデュース学科 (ASP 学科) は、将来アート界で働きたいと志す学生たちが学んでいます。そういった学生たちにとって美術館は学びの場であり、活動の場であり、そして将来の職場になるかもしれない大切な場所です。学生たちが主体的に美術館の現状をより理解し、その存在意義と問題点を考える機会になることを願い、授業の一環として「美術館調査」を行うことにしました。これはその報告書です。

文部科学省の調査によると、博物館および博物館類似施設と呼ばれるものは全国で 5614 館あります。この数字には動物園、水族館なども含まれていますので、それらを省くと 4705 館（総合博物館や歴史博物館を含む）、そのうち純粋に「美術館」と分類されるものは 1087 館も存在しています。単純に都道府県数で割れば、博物館および博物館類似施設は各県に 119 館、美術館だけでも 23 館もあることになるのです。このように全国津々浦々に博物館や美術館があるという時代は、かつて存在しませんでした。

数字からみれば、美術館は多くの人たちの身近にあり、社会や人々の生活と密接に関わっていると言えるかもしれません。しかし、本当にそうでしょうか？ 美術館のイメージを尋ねると、多くの人が「敷居が高い」「かた苦しい」「威圧的」と答えます。そういった人々の意識を反映するかのように、90 年代半ば以降、入館者数は減少していると言われていました。また、長期に渡る不況や財政難のあおりを受けて予算が削減されただけでなく、閉館を迫られた美術館もあります。追い討ちをかけるように、これまで行政の管理下にあった美術館を、民間企業や NPO 法人などの「民間事業者」に管理運営を任せようという「指定管理者制度」も 2003 年に施行され、今後の美術館の運命をさらに不透明なものにしています。

このように、現在の日本の美術館は大きな転換期にあります。そんな美術館の現状を学生たちはさまざまな角度から調査しました。テーマは、各人あるいは各グループが話し合っただけで考えました。調査方法は、学生が美術館を訪れて独自の「診断」を行ったり、来館者にインタビューをしたり、インターネットを駆使したり、またアンケートを 100 館近い美術館に送った学生もいます。テーマ、方法、そして報告書の作成の仕方各人も各人各様ではありますが、全体をとおしてみると、彼らのなかに共通する意識がみえます。それは「美術館は人のためにある」ということです。

私たち ASP 学科では「アート力を社会で活かす」ことを目指して授業や研究、そしてさまざまなプロジェクトを行っています。その根底には、アートは、特定の人と場のためだけのものではなく、人々の生活や社会ともっと密接な関係性を築かなければいけないという理念があります。今回の調査に参加した学生が、こういった ASP 学科の理念の担い手として、閉じられた研究の場としての美術館ではなく、利用者の立場に立つ、社会に開かれた美術館を理想としながら調査を進めてくれたことを、とてもうれしく思います。

最後に、学生の調査にご協力いただきました美術館および来館者、関係者各位にお礼を申し上げます。

2007 年 1 月 9 日

福 のり子

京都造形芸術大学 芸術表現・アートプロデュース学科教授